

和泉式部日記応永本の特質

片岡美幸

はじめに

『和泉式部日記』の伝本としては、(一)三条西実隆筆本、(二)寛元四年奥書系統本、(三)応永廿一年奥書系統本、(四)扶桑拾葉集所収本系統本の四系統が知られている。このうち、(四)については応永本を基とし、寛元本を取り入れた合成本であるとされている。他の三系統(一)を三条西家本、(二)を寛元本、(三)を応永本と略称する)における相互関係については、既に多くの研究が発表されているにも拘わらず、未だ明確な解答を得てはおらず、複雑な点が多く存在している。

本稿は、三系統間の相互関係研究に一石を投じ得ればと願い、今まで三番手と考えられてきた応永本の善

さを認める立場から、応永本の特質を考察した結果の報告である。

まず、応永本^(注1)(宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本^(注2))を主底本とし、三条西家本と寛元本^(注3)(飛鳥井雅章筆本^(注4))を校合本とした校本を作成した。その際、応永本については京大本も参考とした。紙幅の関係で校本の掲載は控え、以下に校本により三系統本の比較検討をした結果得られた、応永本の特徴を述べる。

一 応永本の一般的特徴

本章では、校本から得られた応永本の、諸氏が既に指摘しておられる特徴その他について、検討を加えながら述べることにする。

(1) 応永本は、三条西家本・寛元本より「入れ句」

(補足とみられる語句)が多い。

例えば、四一頁一〇行目^(注5)

くれ

暮・におもひもかけぬに、はかに
.....に

(三)(応)(寛)

右のような「入れ句」が応永本には非常に多く見られる。また、三条西家本と寛元本の「入れ句」の箇所はそれほど多くなく、例に挙げたような応永本のみの「入れ句」が五十五箇所もある。

伊藤博氏は、「応永本は三系統の中で、『入れ句』がもっとも多い。いわゆる『注釈的』役割をはたす語句が多いといつてよからう。注釈的役割をはたす『入れ句』のいくつかは、後の加筆ということが考えられよう。」と述べておられ、また「入れ句の場合、応永本の方が量的にも多く、その入れ句によって、動作主の行為がより具体的になることが多い。ただ、これらの加除・変更が書写者(読者)のいかなる意識によってなされたものか不明である。」とも述べておられる。

(2) 簡略な記述となっている箇所がある。

「入れ句」とは逆に、応永本の方が他本より簡略な

記述となっている箇所もいくつか見られる。

例えば、二六頁一行目、二七頁一行目、

くもあ

すへてくよか・らぬことは

くもあ

うなとはあ

いとくちおしか・・・・・らぬ物・に

うはあもの

(三)(応)(寛)

(三)(応)(寛)

などである。まず、右側二六頁の例では、応永本の「よから」「ぬ」に対して、他二本は「よく」「も」+「あら」+「ぬ」の形をとっている。「も」「あら」が応永本にはないが、文意不通ということではなく、同じく打ち消しの文章で、文章の調子が強いか普通かというだけの差である。二七頁の例では、応永本の方に「など」「は」「あら」がないが文意は同じで、解釈上にはなんら問題はない。これらは、応永本の簡略化とも見られるが、他二本の敷衍とも見られる。

応永本には、このように簡略な記述の形をとっている所が八十四箇所ある。それらのうち、表現の良否に関わる箇所については第三章で触れる。

(3) 応永本にはウ音便が多い。

例えば、四二頁二行目、六四頁一〇行目、

せんかたなう く

(寛)(応)(三)

よ くい
夜ふかう出・
よ くい

(寛)(応)(三)

などである。三条西家本、寛元本共に、「く」に限らず、「し」「き」などの活用している形のものも合わせて比べてみた。(逆に応永本がウ音便でない箇所を比較する場合も、これに従った。)

まず、三条西家本が「く」であるのに、応永本は「う」となる箇所が、四十八箇所あり、その逆は十八箇所であった。^(注8)次に、寛元本が「く」であるのに、応永本は「う」となる箇所が、四十三箇所あり、その逆は十六箇所であった。また、三条西家本が「く」であるのに、寛元本は「う」となる箇所が、二十七箇所あり、その逆は二十一箇所であった。^(注9)

これらを比較してみても、応永本がウ音便となってい

る箇所が、圧倒的に多いということが数量によりはっきりと示された。それに比べて、三条西家本と寛元本の違いは、それほどみられず、数量的にみても応永本との比較のように、はっきりと特徴づけることはむずかしい。

(4) 応永本に特徴のある敬語について

次に、応永本にのみ多くみられる敬語の用法について用例を挙げてみることにする。

④ 「せ^(注10) (させ) おはします」と「せ (させ) 給ふ」

三条西家本、寛元本が「(せ) (させ) 給ふ」であるところが、応永本では、「(せ) (させ) おはします」となる箇所が多くある。

例えば、二五頁五、七、八行目には、この用例が連続して出てくる。

いて 給・・・
出・させおはします 給ふ・・・

(寛)(応)(三)

つかはせおはします 給・・・
給・・・ん

(寛)(応)(三)

(八行目も同じ)

このように、三条西家本が「(せ) (させ) 給ふ」であるところが、応永本では「(せ) (させ) おはします」となる箇所は九箇所あり、その逆は、わずかに一箇所である。

次に、寛元本が「(せ) (させ) 給ふ」であるところ、応永本は「(せ) (させ) おはします」となっている箇所は八箇所あり、その逆は三条西家本と同様、わずかに一箇所あるのみである。そして、この一箇所は、一〇頁五行目にある、

おはしまして
とはせ給ふ・・・
おはしまして

(三)(応)(寛)

で、三条西家本、寛元本ともに同じ箇所である。また、寛元本と応永本との比較にみた八箇所は、全て三条西家本と応永本との比較にみた九箇所の中に入り、残りの一箇所は三六頁八行目にある、

返らせ給・
おはしましてぬる

(三)(応)(寛)

である。

⑥ 「(み) まいらす」と「(み) たてまつる」

三条西家本、寛元本が「(み) たてまつる」であるところが、応永本では「(み) まいらす」となる箇所がある。例えば、一〇頁二行目、

は も たてまつら
御かわりに・みまいらせ・ん
ゆか も見たてまつら

(三)(応)(寛)

などである。

まず、三条西家本が「(み) たてまつる」であるところ、応永本は「(み) まいらす」となる箇所が四箇所あり、その逆は、一三頁五行目に、わずかに一箇所ある。

次に、寛元本が「(み) たてまつる」であるところ、応永本が「(み) まいらす」となる箇所が四箇所あり、これは、三条西家本の四箇所と全て共通するもので、寛元本との逆の用例はなかった。

⑦ 「申す」と「きこゆ」

三条西家本、寛元本が「きこゆ」であるところ、応永本は「申す」となる箇所がある。

例えば、二六頁八行目、

きこえ へは
申・・給・・
聞 え へは

(寛)(応)(三)

などである。三条西家本、寛元本が「きこゆ」であるところ、応永本は「申す」となる箇所は、五箇所ずつある。「申す」「きこゆ」どちらも、謙譲の意を表わす「言ふ」の敬語であり「申す」にしても「きこゆ」にしても、文意が変わるということはないが、応永本のみにみられる、特徴のある箇所といえる。

㊦「あり」と「きこゆ」

三条西家本、寛元本が「きこゆ」であるところ、応永本は「あり」となる箇所が、二箇所ある。例を挙げると、一〇〇頁八行目、一〇二頁九行目、

きこえさす
とあ・・・・・れは
聞 ゆ

(寛)(応)(三)

きこえ給へ
とあれ・・・・・は
聞・え給へ
の二箇所である。

(寛)(応)(三)

三条西家本、寛元本の「きこゆ」「きこえさす」はともに謙譲の意を表わす「言ふ」の敬語である。それでは「あり」はどのような意味に取ればよいだろうか。『岩波古語辞典』によれば、「他の動詞の代行をする。①《助詞トを受けて引用の意を表わす》……と言う。」とあり、敬語ではないが、文意はほぼ同じとなる。

また、これによく似た用例で次のようなものもある。

㊧「のたまふ」と「あり」

まず、三条西家本が「あり」であるところ、応永本は「のたまふ」となる箇所が四箇所、その逆は、二箇所であった。次に、寛元本が「あり」であるところ、応永本は「のたまふ」となる箇所が、わずかに一箇所あり、その逆は二箇所あった。また、三条西家本が、「あり」であるところ、寛元本は「のたまふ」となる箇所が三箇所であった。

以上、㊦、㊧においては、「言ふ」についての敬語「きこゆ」と「のたまふ」の代行を「とあり」で済ませている箇所が多く、応永本の特徴といえる。

(5) 「いかゝ」と「いかに」「いかて」「なにか」
 応永本には、「いかゝ」の用例が多く、三条西家本、寛元本が「いかに」「いかて」「なにか」とあるところまで、「いかゝ」が置かれている。

例えば、三〇頁九行目、七七頁三行目、

て
 つねにはいかゝ
 て

なにか
 如何ゝこかれん
 なに
 む

(三)(応)(寛) (三)(応)(寛)

などがある。まず、三条西家本が「いかに」「いかて」「なにか」であるところ、応永本は「いかゝ」となる箇所が六箇所あり、その逆は一箇所ある。次に、寛元本が「いかに」「いかて」「なにか」のところ、応永本は「いかゝ」とある箇所が同じく六箇所、その逆も一箇所あった。また、三条西家本が「いかに」「いかて」「なにか」のところ、寛元本は「いかゝ」となる箇所は、二箇所あり、その逆も二箇所であった。

このような数値として表れた、応永本の「いかゝ」については、誤写とはいい難く、無頓着といえるほど「いかゝ」を連続して当てており、三条西家本、寛元本の「いかに」「いかて」「なにか」などを無視するが如く、「いかゝ」に固執するような、書写者の意識が窺われる。

(6) 「さま」と「やう」

三条西家本、寛元本が「さま」であるところ、応永本は「やう」となる箇所が多くある。

例えば、七一頁三行目、

さま
 やうにもあらは
 さま

(三)(応)(寛)

で、まず、三条西家本が「さま」であるところ、応永本が「やう」となる箇所は五箇所あり、その逆はわずかに一箇所だけであった。次に寛元本が「さま」であるところ、応永本は「やう」となる箇所が、四箇所あり、その逆の用例はなかった。逆の用例の少ないこと、また、数量的にみても、これは応永本における特徴といえよう。

(7) 日付について

三条西家本、寛元本が、漠然とした日付であるのに、
 応永本では、はっきりとしている日付の箇所、また、
 その逆もみられる。例えば、一九頁一行目、

二 あり

・三日有・て

二 あり

(寛)(応)(三)

で、まず、三条西家本が漠然とした日付であるところ、
 応永本は、はっきりとした日付となる箇所が二箇所、
 その逆は、また同様二箇所であった。ただし、三条西
 家本の方で、二〇頁五行目にある「二三日」について
 は、「二」が見せ消ちとなっているので、これは加え
 なかった。次に、寛元本が漠然とした日付であるところ、
 応永本ははっきりとした日付になっている箇所が
 三箇所あり、その逆は二箇所あった。この三箇所は、
 先ほどの三条西家本の見せ消ちになっている箇所が、
 寛元本では「二三日」とあることにより、三条西家本
 と寛元本とは、その箇所を除けば、日付に関しては一
 致する。また、応永本より、他二本の方がいくらか日
 付を明確にしていると思われる箇所もあるが、これも

加えなかった。

以上、見てきたような点が、応永本にのみ認められ
 るか、あるいは特に多くみられる、特徴ある箇所であ
 る。

二 倒置について

応永本には、三条西家本・寛元本と語句の位置が入
 れ替わっている箇所がある。例えば、九頁四行目、

人・

も、

ひとはことに・め・ととめぬを

・・・

人は

・

(寛)(応)(三)

などのように、一本または二本と倒置関係にある異同
 がみられる。

吉田幸一氏は、『和泉式部研究一』の中で、「三系
 統本の相互倒置関係にある語句の処置」として、用例
 数二十四に及ぶ、三系統本間における倒置関係につい
 て、次のように分類されておられる。

(1) 「三条西本」と「寛元本・応永本」とが倒置関係
 にあるもの——(計十二ヶ所)

(2) 「寛元本」と「三条西本・応永本」とが倒置関係

にあるもの——（計四ヶ所）

(3)「応永本」と「三条西本・寛元本」とが倒置関係にあるもの——（計五ヶ所）

(4)そのほかの場合——（計三ヶ所）
そして、また、

語句の順序の倒置、倒置された語句の間に他の語句が介在されたもの、さらに複雑化してゐるものなどを見ることができるが、——略——文章そのものにおいて、特別な語句の増減がない限りは、大体に（注）
おいて大差ないのである

と述べておられ、用例のほとんどがこのことに当てはまるといえよう。ただ、ここで、吉田氏の用例数二十四に注目したい。吉田氏が比較された応永本は、一般的に比較に多く使われる京大本であり、本稿で用いた書陵部蔵本とは、同じ系統の本ではあるが、多少の異同があるゆえに生じたことかもしれないが、倒置関係にある語句を拾い上げたところ、その用例数は二十九であった。吉田氏の挙げておられるイウの（注）
（注）ウの続きの符号を与えて、他の五箇所を示す。

いか

④如何にまして・・・おほつかなからん

・・・
いかに

(三)(二〇・二)
(寛)(応)

猶 くるしう

⑦独くるしうてなをいとあやうしこそ

・ ・ ・ ・ ・
く (寛)(三)(八二・10)

⑧日のかけ・心ほそう

・ ・ ・ ・ ・
(寛)(三)(八七・1)

雨 雪

⑨雪もふり雨もふるめる

雨 ゆきと な (寛)(三)(九一・7)

・ ・ ・ ・ ・
あり

⑩ひるつかたある御ふみを

(寛)(三)(九五・7)

右五例を加えて、計二十九例を、吉田氏の分類にあてはめると、

(1)に当たるもの——
⑩③④⑤⑥⑦⑧⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

十四例

(2)に当たるもの——
①②④

三例

(3)に当たるもの——
⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

六例

(4)に当たるもの——
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

六例

吉田氏はこのような倒置ということについて、次の

ように述べておられる。

以上のやうな倒置関係について考へてみると、二系統本の一致は一系統本のその異文よりも原型に近いといふ見地に立てば、(1)の三条西本十二ヶ所は、八寛元本・応永本√の共通本文(原型)を、倒置したものといふことになり、添削意識をもつて改変した割合が、三系統本中で最も多いといふことになる。

しかし同様な見地からすれば、寛元本や応永本とても恣意的改変が全くなされてゐなかつたとはいへない。(2)と(3)はその割合を示してゐる。もちろんこれだけをもつて、すべてを律するわけにはいかないが、転写中に語句を倒置するといふことは、書写者の不注意による誤写に原因すると見られる場合もあり、意識的改変といふ恣意的操作の結果と見られる場合もある、といふことである。いづれも判然と区別できる根拠を見出すことはちょっとむずかしい。」

おおむね氏の御論に従う他ないのであるが、中には諸本関係を究明する手がかりを与えてくれるものもある。それらの中から、㊦の例を採り上げ、応永本の特質を考察する一助としたい。用例を下段に再掲する。

この例では、「雨」と「雪」とが、応永本と三条西家本・寛元本で倒置関係にある。単なる誤写によるも

雨 雪
雪もふり雨・もふるめる
雨 ゆきと な (寛)(応)(三)

(九一・七)

のであるとは言い難い。なぜなら、京大本も書陵部本と同じ「雪」「雨」の順序になっているからである。また、「ふるめる」についても、寛元本では「ふるなる」となっており、三条西家本と寛元本とでも解釈が異なることになる。関係を記号化して表すと次のようになる。

三条西家本——「雨」＋「雪」
応永本——「雪」＋「雨」 (京大本同)
寛元本——「雨」→「ゆき」

三条西家本においては、応永本と語句の倒置ということで済まされようが、寛元本においては、「それまで降っていた雨が雪と変わり降り始めた」ということで、解釈の上からみても、寛元本においては、明らかに差異が認められる。応永本の他の諸伝本においては、ここはどのようなになっているのか調べてみると、吉田幸一氏蔵の板本が「霜」「雨」となっているのを除けば、全て桂宮本と同じである。また「ふるめる」については、板本が「ふりぬる」となる他、扶桑拾葉集本

系三冊が「降ぬる」とあり、応永本系統は「ふるめる」となっている。

吉田本の「霜」については、下句に「朝霜とのみおきゐてはみる」とある点から、誤写によるとみる。「ふりぬる」「降ぬる」に關しては、「この比を」とあることから文意はつながり、誤写、あるいは恣意的改変によるものと考えられる。となると、やはり「雪」と「雨」による異同ということになるであろう。

それでは、どの本が原本により近いといえるのだろうか。八九頁八行目には、次のようにある。

雪 いたく 日・・・
十一月ついたちころ霜のうち・ふるつとめて
雪・ (寛) (応) (三) (八九・8,9)

世よ 雪
神よりふりはてにける霜なれ
代よ 雪 (寛) (応) (三) (八九・10)

は かな かへ
とけふはことにもめつらしき哉・御返・し
かな かへ (寛) (応) (三) (九〇・1)

雪

はつ霜といつれの冬もみるまゝに
初・雪

(寛) (応) (三) (九〇・2)

この箇所によれば、三条西家本、寛元本においては、「十一月ついたちころ」の雪の日の贈答歌から、この日「はつ雪」だったことが知られる。八九頁九行目の応永本の「霜」は、京大本では「雪」とあり、三条西家本、寛元本とに一致する。また、八九頁一〇行目の「霜」も、京大本では「雪」とあり、三条西家本、寛元本とに一致し、応永本にのみ異同がみられる。とすると、「霜」は「雪」の誤写であるのか。下に「ふる」とあるが、「霜」であれば「置く」としたいところである。このことも合わせてみると、応永本の「霜」は「雪」の誤写ということが考えられよう。

また、応永本と寛元本とが「うちふるつとめて」とあるところ、三条西家本では「いたくふる日」となっている。全くの逆な文意といえよう。「少し」に対し、「大そう」とでは、文意についても異同が認められる。そこで、どちらの本を取るかであるが、「はつ雪」であっても、ひどく降らないとは限らないはずである。しかし、『日本紀略』にも『扶桑略記』にも、この頃

「大雪」という文字は見当たらない。どちらにしても、この日が「はつ雪」であったということは確かであろう。

次に、九一頁二行目の「つねよりも霜のいとしろきに」の記事から、同頁九行目までの記事を、十二月八日頃と推定する^(注2)、とすると、九四頁一行目の「あけぬればおはしましぬ」は、十二月九日頃ということになる。そして、その間にある、九二頁七行目には、「みそれたちたる雨」とあり、雪がとけ始め、みぞれめいた雨になったという箇所がある。

そして、何よりも決定的なものとして、九一頁五行目に、「その比雨なとのはけしければ」という箇所が問題の七行目の前にある。

つまり、「雨なとのはけしけれ」とある日、「雨もふりゆきとふるなる此ころを朝霜とのみおきあてはみる」と歌を詠み、「みそれたちたる雨のゝとやかにふる」では、一夜のうちの変化が強すぎるといえよう。まず、寛元本は除くことにし、それでは、三条西家本か、あるいは応永本かということになる。

「はつ雪」が降ったのは、「十一月ついたちころ」であった。九一頁七行目を、十二月八日頃の記事と推定すると、その間に「雪」の降ったという記事は書か

れていない。それでは、一ヶ月も前に降った雪（あるいは、記されていないだけで、雪の降った日があったかもしれないが）のことを指して、「ゆきもふり」というのであろうか。やはり不自然である。

ここでは三条西家本の文章が一番的確であるといえよう。つまり、「雨はけしければ」という記事があり、その後に「みそれたちたる雨のゝとやかにふる」とあることから、その夜は「雨」であり、時には「雪」になったのではないだろうか。故に、

雨もふり雪もふるめるこのころをあさしもとのみをきるては見る
が、一番自然であるように思われる。

三 応永本善本説

一般的に、『和泉式部日記』は、現存最古の写本である三条西家本が、研究書、注釈書などに善本として使用されているが、必ずしも全てがよいというわけではない。この章では、本稿で主底本とした応永本の方がよいと思われる箇所を、二、三挙げて検討してみた。

まず、二三頁五行目の欄外付加部分の

うさのみ
に
ふれはよのいと憂きみのしらるゝを

う
身

(寛)(広)(三)

三条西家本では「うさのみ」とあり、広く世の中一般に目が向けられており、応永本、寛元本では「憂(う)きみ(身)の」と自分のことだけに焦点を当てている。そこで、すぐ前の「しのふらん」の歌に注目したい。「身を知る雨」とは、「この時代、恋仲で相手から愛されない悲しみの涙や、そうした涙を想わせる雨を言うのに用いられる。」^(註22)句であるので、「ふれはよの」の歌は、三条西家本のように、世の中のことで広く見ていられず、自分と宮さまのことだけに閉じている「憂きみの」の応永本(寛元本)を善しとしたい。

次に、二九頁七行目の

あさ露・の ひ

朝・ことにおくる思・にくらふれは

露・の おもひ

(寛)(広)(三)

を考えてみることにする。この歌は、この前にある「よひことにかへしはすれといかて猶暁をきは君にせさせしくるしかりけり」を受けており、「暁をきは君にせ

させしくるしかりけり」とある部分は、一見すると

「私と同じように宮に苦しい思いをさせたくない故、もう通ってきて欲しくない」と拒んでいる歌のようであるが、ここは式部の気持ちを掘り下げて考えると、本心からではなく、当時の女性の恋愛におけるテクニクのようなもので、宮の気持ちを探ろうとして詠んだものであると思う。そして、そのことに対して「朝ことに(あさ露の)」の贈答歌が成立するのであろう。確かに、この歌一首だけであれば、三条西家本、寛元本の「あさ(朝)露の」の方が秋の風情を詠んで優れた歌であるように思われる。しかし、贈答歌として見た場合はどうであろうか。「よひことに」とあり「あさことに」と返している応永本の方が善いと思う。

次は、第一章(2)で採り上げた簡略な記述となっている箇所の良い否を検討する。簡略な記述ゆえに意味の解しにくくなっている箇所も多くあるが、(三八・10)

きみたり

日比・はあやしう・心・ちのなやましさに

ひころ きみたりこゝ

(寛)(広)(三)

のように、「馬から落ちて落馬する」的表現から応永本のみが免れている場所もまた存在するのである。

例・ せさ せさ せよとておはします女・ は

また
月
人

・はしに・なかめて居たるほとにひとのいりくれ

また
月
人

はすたれうちおろしていたれは

あ　　い　　あ
　　た　　は
(寛)(応)(三
　(三五・三)

こゝは 女が宮に「月をみてあれたるやとになかむとは見にこぬまでもたれにつけよ」と歌を贈つたので、宮が大急ぎで女の家を訪れた時の女の様子の描写である。三条西家本・寛元本では「女はまだ端に月眺めてゐたる」とあって、ずっと月を眺めていたことになつてゐるが、「月をみて」の歌を詠んだのは「月のあかき夜うちふしてうらやましくもなとかめらるれば」であつたのだから、「ながめ」は「物思ひにふける」方に重点があるはずで、応永本の「女はしにながめていたるほどに」という描写の方がマツチするのである。

他にも応永本の方が善いと思われる箇所がいくつか

あるが紙幅の都合で割愛する。以上のことから、部分的には「応永本善本説」が成り立つものと考ええる。

結
び

以上、応永本に視点を置いて三條西家本、寛元本との比較考察を試みた。まとめると次のようになるう。

1、応永本には「入れ句」が他二本に比べ多い。

2、応永本には、敬語の使用に関して独自の傾向がみられる。

3、語句の倒置に関しては、三条西家本に独自のものが多いが、応永本独自のものに注目すべき点がある。

4、応永本が他の二本より表現の優れている箇所がかなり見られる。

三系統相互にみられる異同は、書写者（読者）による恣意的改変によるものか、あるいは単なる誤写によるものかは、なおも明確にすることはできないが、少くとも三条西家本を最善本と決定するのは早計で、応永本にも注目すべき点が多く存することだけは証し得たと思う。

たと思う。

〈注〉

- 1、『影印本和泉式部物語』（新典社）を使用。なお、書陵部本は応永本系の中では最も善本であるという森田兼吉氏の御研究がある。（『和泉式部日記論攷』（笠間書院）、第一章二）
- 2、吉田幸一『和泉式部全集本文篇』（古典文庫）による。
- 3、2に同じ。なお、寛元本を主底本とする校本が同書に掲載されているが、本稿では応永本の特質をより明確に把握できるように、あえて応永本を主底本とする校本を作成したのである。
- 4、2に同じ。
- 5、1の頁数、行数。以下校本の頁行はこれに従う。
- 6、伊藤博『和泉式部日記伝本攷』（桜楓社）。氏によると「入れ句」は四十二。
- 7、伊藤博「和泉式部日記伝永本について」（『国語国文学論集』山形大学教授永山勇博士退官記念会編・風間書房、昭49）
- 8、7において伊藤博氏は、三十六箇所あり、その逆は十二箇所あるとされている。
- 9、6において、伊藤博氏は二十三箇所あり、その逆は十六箇所あるとされている。
- 10、伊藤博氏は「和泉式部日記寛元本について」（『国語国文』）の中で、次のように述べておられる。（「せ（させ）おはします」については、森野宗明氏、石井文夫氏の

の御指摘が有益である。森野氏は、落窪物語、源氏物語、枕草子にみられる用例が会話の文に集中していることか、
 陵部ら、十世紀の終わりから十一世紀のはじめにかけて、
 「『おはします』」の助動詞の用法が派生したばかりで、
 口頭語としてのみ用いられ、書記語としては、会話部を
 写す場合におさえられ、自由な使用がためらわれていた
 不安定な、揺籃期にあったことを示唆するもの」と説い
 ておられる。さらに、四条宮下野集にみられる用例の検
 討から、十一世紀の中ごろ、「宮廷貴族社会の、すくな
 くとも一部では、『おはします』の助動詞の用法が、書
 記語としても用いられるまでに熟成していたと考えられ
 る」と述べておられる。右の森野氏のお説を進展させて、
 石井氏は、建寿御前日記からとはずがたりまでにみられ
 る「せ（させ）おはします」の用例を求められて「おは
 します」の助動詞的用法は、「宮廷貴族社会の日常語と
 しては、書きことばとして、会話の文・心話の文・地の
 文をとわず、一般的に用いられる段階に、一三世紀のは
 じめまでには、到達していたといえよう」と説いておら
 れる。以上の森野、石井両氏のお説のごとく、「せ（さ
 せ）おはします」は特徴のある語である。それが応永本
 にのみ多くあらわれる。）

- 11、7において、伊藤氏によれば八箇所とされている。
- 12、7において、伊藤氏も四箇所とされている。
- 13、7において、伊藤氏も六箇所とされている。

14、7において、伊藤氏は五箇所とされている。
15、校本の九頁二行目にある箇所。

十よひ

四月・・・

十よ日

(寛)(応)(三)

16、『和泉式部研究一』（古典文庫）第五章「現存諸本の

共通祖本への復原と各系統本の欠文の処理六」

17、16に同じ。

18、16の書の二八二～二八五頁。

19、16に同じ。

20、2による。

21、16による。

22、『和泉式部日記上』小松登美（講談社学術文庫）。